

事例発表①

「シニアが活動する児童サービス」

講師: りぷりんとネットワーク理事 藤原 佳典

1 持続可能の基盤は世代間交流

社会の変化にあわせて世代ごとの不安や負担もまた変わっている。若者には雇用不安があり、高齢者には生活や健康の不安がある。また、例えば子育てと介護が同時に発生するなど、複数世代にわたる多問題化によって、従来の支援体制では個別対応が困難。次の世代へ社会や暮らしを持続させていくためには、多世代へのアプローチと支援機関の連携が求められる。

多世代へのアプローチには世代に関わらず互いに支援しあう地域の交流、「世代間交流」が求められる。世代間交流とは、異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、次世代継承とは高齢者が習得した経験や英知、知識、技術、思いを若い世代に伝えることを指す。そこで、高齢者によるシニアボランティアが、交流や連携の力となっていく。

また、現代社会における世代間交流は「三方よし」の考え方で計画的に行っていくことが大切。例えば米国では Experience Corp という小学校でのシニアボランティアによる健康づくりプロジェクトで高齢者・児童・保護者と教師の三者にとって、それぞれが健康増進、成績向上、職務モチベーション向上などの成果がでている。

2 世代間交流事例-REPRINTS(りぷりんと)プロジェクト-

REPRINTS には現役生活の復刻という意味をもたせた。

シニアボランティアの募集では、通常、経験者が多くなってしまふ。そこで、未経験者も興味を持てるように絵本を用いた「認知症予防」を前面に出した。

絵本の読み聞かせを選択したのは、図書館を通じて多様な種類を無料で利用でき、メッセージ性と登場人物への同調のしやすさといった利点があったため。

実際にボランティアになるまでに、生涯学習型・認知介入プログラムを実施した。読み聞かせの知識や技術を習得する過程で、いわゆる脳トレと健康づくりの要素を入れた講座を受講す

る。

技術の習得後は6~10名ほどのチームに分かれ、週に1~2度の頻度で小学校や幼稚園などの施設へ赴き実践となる。読み聞かせの準備等はすべてボランティア自身で行う。

PDCA サイクルを利用し、常に読む絵本を変えるなどマイナーチェンジを心がけることによって、ボランティア活動の質が向上するとともに、ボランティア自身の認知や言語機能の維持・体力低下防止等の効果があった。

3 「三方よし」実践での他方への効果

ボランティアを受けた側にも効果があった。

子どもは、読書の推進や高齢者への親近感・尊敬の維持があった。高齢者と集中的に交流した児童においては、ストレス得点が減少したという報告もある。

保護者は学校行事や奉仕活動に対する負担が軽減し、学校や教師にとっては地域との連携モデルとなっている。



▲事例発表①